2019 年度ＧＴセミナー
第 51 回保育環境セミナー
2019.8.5 ～ 8.7 前編

第１２８号　２０１９年８月１２日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

第５１回保育環境セミナー

２０１９年８月５日～７日に第５１回保育環境セミナーが
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から 150 名程の先生方が集まり、藤森代表の講演や実践発表、
園見学等３日間に渡り行いました。

1 日目　2019 年 8 月 5 日（月）

10：00～　園見学
13：30～　見学園紹介
15：00～　ＧＴ活動報告
15：00～　休憩
15：30～　講演
17：15～　意見交換会

2 日目　2019 年 8 月 6 日（火）

9：00～　実践園報告
9：30～　見守る保育の５つのポイント
11：45～　ミマモリングソフト紹介
12：00～　昼食
13：00～　ドイツ報告
14：00～　Ｑ＆Ａ
16：00　終了

3 日目　2019 年 8 月 7 日（水）

10：00～　園見学

第５１回保育環境セミナー　基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

―はじめに―

皆さんこんにちは。九州の方の方は台風大丈夫だったでしょうか。よくセミナーと台風が当たるので、ひやひやします。ドイツ研修に鹿児島から参加した方がいたが、ちょうど水害があって、珍しく登園が無かったというので、向こうでどうしようもないが、ハラハラしていた。九州から来た方はびっくりしたと思うが、地震があって、色々な災害が起きることで心配になる。この暑さも来年のちょうど今頃、オリンピックを流行っている最中で、大丈夫なのかとか、ボランティアの方も大丈夫なのかなと思う。日本は温帯地域と言われるが、最近、亜熱帯地域と言われるようになってきた。先日もうちで看護師が言っていたが、プールに入る時、寒いと今日は入れるか？と水温と気温がどうかという話を気にしていたが、プールは暑い時に入るもので、寒いと入れないが、最近は暑いから入ってはダメとか、熱中症も暑いからプールに入ればいいだろうではなく、プールで熱中症になることもあり、プールが禁止の小学校もある。なので暑すぎてもダメで、寒すぎてもダメですね。東京の場合は、光化学スモックというのがあって、外に出てはいけないだけでなく、窓も明けてもダメで、開けていると目がちかちかする。そうするとクーラーを使わざるを得ない。そうすると子どもたちは夏風邪になって休むが、悪循環になって酷くなっている気がする。先日、シンガポールに行ってきたが、熱帯地域で非常に暑い。朝歩いていても暑いが、保育園はクーラーを使っていない。私の園では、クーラーを使っていたが、ある時からあまり使うのはよそうとなった。それは、人が汗をかくのは体温を下げ、調整するために汗をかいているものが、快適な環境の中にいると、汗をかく経験がない。そうすると汗腺が出来なくなる。そうすると体温調整できなくなるので、暑い中に入ってしまうと一気に体温が上がってしまい、調節できなくなると言われている。ですから、ドイツにしてもクーラーを使わない。それを日本だけは使いますね。今まで小学校で使わなかったのが、去年から熱中症になる子が多くて、親の要望で教室も体育館も使うようになった。果たして、いいのかどうか。親はこんな暑い中では無理だと言って、国は一斉に補助金を使ったが、それは本当にいいのかと外国に行くと、シンガポールはよくクーラーを使う国だが、保育室だけは使っていない。ドイツも暑いけど、壁面緑化で下げる中で、日本はどんどん機械で体を調整しようとしていますね、同じように、日本の子どもたちは怪我が、急激に増えている。特に上半身の怪我、顔にけがをすることが増えている。それなので、ちょっとした危ないところが指摘されたり、危ないからと言われるが、いつからそんなに怪我が増えたのかがあって、そもそも子どもはそんなに怪我をするものなのか。私は元々人類が生きてきた中で、でこぼこや段差、穴があり、その中を生きてきた。そうすると赤ちゃんは、それをよける能力を持っていたでしょうし、転んでも大けがをしなかったり、あまり怪我をしないようにできていたと思うが、危ないと思って防いでしまうと、本人の防ぐ力がなくなってきている気がする。それが急激に増えている理由でもあるんですね。ドイツで数年前に園庭が改修され、芝生で覆われていたが、それが改修され一部分は砂利、段差や石ころが転がっていたり、オランダに行った時も、玄関に向かっていく途中には、大きな石や石畳、砂利道を通っている。向こうの園長は、「この園庭は、町で体験する地面を再現しているので、街でも安全に歩けます」と言っていました。それからトイレが改修されています。１つは小便器を失くしています。それは家にはないからです。日本では０１歳は便器が小さいですけど、ドイツは小さいのを取り払って、大人用の便器に入れ替えています。そこに台をつけて、淵をつけています。それは、家がそうしているからと、子どもたちが家で、地域で自分の力で生活できるよう園で、そういう環境を整えていると言っていました、園の中だけ快適では意味がないと

いうことです。地域に段差があるなら、園にも段差をつけるとか、ドイツへ行ってビックリしたのが、ビーハウスという虫のホテルと言って、蜂を呼ぶようなものを園で作っている。もし日本で蜂を一匹に見つけただけで親から、退治してくださいと言われるが、そしたら世界中の蜂を退治しないと生活できないが、ドイツでは森が多いし、蜂もいっぱいいるので、園に蜂の巣を作って、わざと蜂を呼んで、どうしたら驚いて刺してくるのかを園で学んでいる。不用意に森の中を歩いていて、驚かしてしまうと刺されてしまうので、それを学ぶために園の中に蜂の巣を作って、学んでいる。避けるとか退治するとか、除去するのではなく、それと共に共生することで、どう付き合えばいいかを学ぶのかが保育園という考え方としています。実はこれはアレルギーにおいてもそうです。一昨年１月にアレルギー学会があった時に方針を変えた。急に増えたきっかけは、除去食を始めてからなんですね。除去はアレルギーを増やすことになると、除去から摂取に変えよう、接種させて直す方法に変わった。花粉症のアレルギーの職員がうちにいるが、月に一度、舌下治療と言って花粉を入れています。除去ではなくて、入れることをして、自分で防げれるようにする。失くすことで安全安心にするのではなくて、防げる力を本人が付ける。付けようではなくて、元々持って赤ちゃんは生まれる。例えば、菌も赤ちゃんは産道を通ってきます。その周りに菌が付いているが、そこを通るとお母さんの菌をつけてきます。半年はお母さんの免疫力を受け継いでいる。それが半年前から感染症になる子が増えている。その一つは帝王切開のように、産道を通らない場合、受け継いできませんので、そういう場合とか、生まれてから菌をふき取ってしまうことがあります。参道を通ることで、菌をつけるが生まれた後に、お母さんの菌が切れた頃には自分の中に取り入れないといけないので、母乳を飲むことで、回りの菌をなめることで、一緒に取り込んでいると言われています。これが一時期、菌が付いていることがわかり、私の子どもが赤ちゃんの頃、よく消毒してから飲ませなさいと言われました。赤ちゃんにとっては必要な菌なのに拭きとってしまった。哺乳瓶も消毒するので、菌をなめることがありません。本来は母乳を飲むことで菌を取り入れる。そして今度はハイハイが始まる前には、ハイハイすると強い菌に触れることがある。もっと強い菌を体に取り入れないといけないので、這う前に始まるのがなめ回し時期。これも私の孫を見て思うのが舐めるのも、スリッパやゴミ箱や財布など汚いないものをなめようとする。熱湯消毒をした物よりも、菌の付いたものをなめようとする。だからと言って、病気にもならない。赤ちゃんは必要なものを取り入れて、菌を防ぐ力をつけています。菌がよくないと思って、それを排除しようとする。必要な菌まで失くしてしまう。それが最近、危険だと言われるのはマウスウォッシュの様な、口の中を消毒する薬があるが、虫歯菌を殺せるかもしれないが、身体にとって必要な菌まで殺してしまうと言われている。本人が持っている力を、失わさせてしまうことがあるが、保育の中でも最近言われていて、赤ちゃんは必要なものもって生まれ、必要でないものも持って生まれ、生まれた後に何が必要なのかを選び、いらないものを削っていく。昔は、赤ちゃんは白紙で生まれ、色々な物をつけていくと言われていたが、今は何でも持っていて削っていく。ためだと思ってやってしまうと、いらないと思ってしまう。段差を超えるとか、台から下に降りる時に、赤ちゃんは深さ深度を感じると、危ない所に行かなくなる。移動距離が多い子ほど感じると言われている。これが危ないからと言って、平らな所ばかり歩いていると、段差を感じなくなってしまう、それから危ないからと言って止めると、移動距離が少ないので、危険なものを感じる力がなくなってしまいます。職員から〇君がどこどこで怪我をしてしまったと報告を受けたときに、とっさに思うのがどんな親か気になる。園を理解している親なのか心配になる。運が悪いのか、そういった子に限って怪我をする。運が悪いかなと思ったが、最近の研究から見ると当然です。文句を言うような親の子は移動距離が短い。止めている子ほど怪我をするのは当然です。子どもの移動距離が少ない。「あっち行ってはダメ！」と止めている子ほど、怪我が多いのは当然で関連していた。「ちょっと、ここが危ないのではないか？」という親は、家でもそうだとしたら、怪我をする。基本的にけがは避けないといけない。しかし、ただ平らにして避けるのではなく、自ら避ける

力、防ぐ力をつけないといけない。そのためには、どれくらいなら、防げるかを理解しないと怪我をさせることになる。どれくらいまで防げるかを知って、ちょっと大きな石、段差があるとか、その子が出来るちょっと先を用意する。

―「見守る」とは―

よく「見守る」というと、見ているだけ、守り過ぎというが、「見る」という言葉は、子どもの発達をよく見ないと、どこまで守らないといけないかが分からない。「守る」のは、ただガードするのではなく、怪我をしない、感染症をしないかをよく見て判断する。質問で喧嘩をした時に、どこから介入したらいいかを聞かれることがある。注意した方がいいかを聞かれるが、それを答えるのは難しい。どれくらいで介入するかは、個人によって違うからです。喧嘩だったら、二人の関係によって違うからです。ピーステーブルで子どもたちが話し合っていったが、３歳なりたての子で、３歳の担任がどう話しているかを観に行こうとしたら、年長の子が来て、「先生、あの二人なら大丈夫だから、行かなくても平気だよ！」と言っていた。年長でさえわかる。どの子なら平気なのか、行かないといけないかを考えることが、「見守る」ということです。見ているだけでも、守るだけでなく、その子の発達、その子の様子、関係を見て理解しないと、いつから手を出していいか分からない。もともと持っている力を減らしてしまうからです。実は赤ちゃんは言葉を覚えたり、脳の中のニューロンと回路、シナプスという数ですね。そうすると、赤ちゃんは喋りはじめ、出来るようになるということは、その度シナプスが手を繋ぎ、繋ぎ合わせている。どんどん刺激を与えると、複雑になっていくと当然思う。私の子ども頃も、刺激を受けてしわが増えるという言う言い方をして、刺激しよう、３歳位まで増えるのでそれまでに刺激させたり、させるべきという、いわゆる早期教育や３歳児では遅すぎると言われてきた。それが３０年前に全く違うと言われてきた。シナプスの数がどうなっているか。それまでと全く違うことがわかってきた。若者になるとピークで、年を取ると死滅していくと言われていたが、実は科学誌に載っていた神経細胞の数です。紫色が胎内です。１歳から２歳です、園児のグラフがシナプスの数です。これが胎内では出産まで急激に増えて、１歳までが急激に増えて順に減っていきます。この上に書いてあるのは、神経細胞と言われるネットワークは、増えていくと思っていたが実はそうではなくて、生まれてから急激に増えて減っていく。減らしていく方が効果的。この子がどこの国に産まれて、どんな障害を持っているか分からないので、いっぱい作って、いらないものを削っていく。必要なものをより太くと書いてあるが、神経の道がいっぱいあるので、必要な物を残して、いらないものを削って必要なものを太くしていくことがわかってきた。そうすると減らしていく。何がいるのか、いらないのか、減らす時期は赤ちゃんが選択していると言われている。赤ちゃんはいるだろうというものを太くして、いらないものを減らしていく。ＴＶで一時期話題になって英語の区別で、日本人はＬとＲの発音の区別が出来ない。これを区別できるかどうかを世界中の赤ちゃんは同じ比率だけ区別が出来た。それが日本にいると、区別することがいらないので、ら行を正確に発音するところを太くする。同じように韓国語にも発音があるが、韓国にいるとその発音の区別が出来るようになる。その子にとって、ＬとＲの発音の区別をつけるよりも、いらないものを削る。顔の区別もそうで、人の区別と同じようにサルの顔を見せて、他の顔を見せると人間が他の子が出て来たと同じような区別が出来るが。人だろうが、サルだろうが区別が出来ると言われている。私たちはサルの顔の区別はいらないので、人の顔の区別をより正確にできるようにしている。赤ちゃんが必要だと思うから残すが、大人が子どものためでやってしまうと減らしてしまう。お腹が空くと泣いて訴える。お母さんは、お腹が空いていると思って、母乳をあげると哺乳瓶を自分で離します。人によって飲む量が違うが、増える体重の量を知っている。おなか一杯になったら飲むのをお終いにするが、哺乳瓶にすると、時間を決めてあげると、赤ちゃんはその時間になると与えられるから、

欲しくなって訴える能力を削ってしまう。それから、哺乳瓶であげていると、哺乳瓶にまだ残っているから、のめのめとすると、飲める量を自分で分かっているのに、与えられていると能力を削ってしまって与えられて飲む能力を残してしまう、将来摂食障害を起こしてしまう。拒食症や過食症などは、自分の体重を増やす判断が出来なくなってしまうと言われている。「見守る」ことで、今度は自分で必要なこと、大事と思うことを訴える。欲しかったら欲しいというものをあげることを応答性です。

―「見守る」保育のポイント１―

「見守る」のもう一つのポイントは、先回ってやらないことです。本人がやって欲しいという時に、やってあげることが、赤ちゃんにとって必要なことです。一人遊びをしている時はあえて介入しない。その変わり、赤ちゃんが大人を自分の活動に巻き込みたいと思ったら、積極的に関わる。見ている部分と、守る部分の差は、次の発達を見ることと、言われてからやること、これが「守る」です。それを私たちは決めつけない、抱っこして欲しかったら訴えるので、訴えなければやる必要はない。５歳でも訴えたら抱っこしてあげた方がいい。よくいろんなことをやってしまうと、依存するようになるからと言われるが、赤ちゃんや１歳児は、必要でないことまでやってあげると依存する。
必要でないことをやってあげるのは、大人が子どもに依存していると、子どもの方も大人に依存してしまう。自分で出来るようになると言わなくなる。今日給食の後を見ていないかもしれないが、１歳児がエプロンをしまっていた。自分で仕舞えなかったから、先生に「やって！」と来たらやってあげる、依存はしません。自分でやるようになったら、自分でやります。依存になるのは、出来るのにやってしまうことがある。これが実は機能が増すという時期がある。

―「見守る」保育のポイント２―

センシビリティというが、脳の分野が分かれています。見る部分、聞くところと機能に分かれています。場所によって、発達するのは違います。指針の改定に使われたグラフを見てもらいます。いつ、どの機能が発達するかが書かれています。アメリカの研究だが、人生のチャンスと健康に影響すると書かれています。アメリカでは、４歳半からプレスクールの入学する時期です。これを見ると、ほとんどグレーの濃い所、就学前（４歳半以前）がピークです。
これがどういう意味かというと、日本で示されているのとは違うが、なぜ乳幼児期の発達が必要なのか。包括的な回答として、その後の人生のチャンスや健康に決定的に影響を与えるとハーズマンという人が言っています。就学までに起こる脳の発達内容から見ると、４歳半時点で、その後の人生の成功の基礎能力に影響を与えると、彼の研究によって発表されています。そのためにどんな保育が必要か研究されています。その一つのキーワードが応答性です。
大人が先回ってやるのではなくて、子どもが言ってきたことに応えることと、アメリカやイギリスの研究でされています。あの時期にやらせれば高くなるのではなくて、保育で言うと自発的な遊びを保障する。自分がやろうとしていることを保障すると、脳が大きくなると言われています。言われたことをやるようになっても大きくなりません。
その通りやることは、脳の活性化にならないと研究で言われ、実は研究されていない。もう一つの大事なことがあります。私が気づいたものの一つが、まずエモーショナルコントロール（我慢する力）。エモーショナルコントロールは、９ケ月～１歳半くらいがピークです。なんで我慢する力がこんな小さい時から必要なのか。一番我慢する必要ない時期に思うが、何でこんな早いかというのが研究されていないが、私は研修者ではないので、私の中で９ヶ月がつながった。トマセロの９ヶ月革命があります。トマセロは、赤ちゃんは９ケ月になると、他者の意図を持った存在として認識すると言っている。ということは、我慢する力。あれを欲しがっているのだろうと思うから、我慢することに繋がっていると思っている。人類の進化からも９ケ月が出てきた。人類は出産期が短く、産まないといけないの

で、上の子が９ケ月になるとお母さんは膝からおろして、離乳をすることで次の子を妊娠する。そうしないと次の年に生まれないです。９ヶ月になると、お母さんの膝からおろされてしまいました。９ヶ月だと一人では生きていけないので、人類だけ家族を作り、社会の中で共同保育をしてきます。脳の高さの時期に、赤ちゃんは共同保育をされているのですね。そうすると他の子もいます。他の子の意図を感じるようになるので、我慢するようになります。そうすると、この時期にはかつては、家では次の子が生まれる頃です。もっと昔だと、共同保育をされたことで、他者を認識し、自分の感情をコントロールしてきたのもわかった。ビジョンには、見る力と、もう一つは見通す力。これは、エモーショナルコントロールは先を観ることで、我慢することが出来ます。いつも抱っこをせがむ子がいました。抱っこされたくて泣いています。そうすると、普段は泣いて抱っこを求めるが、先に自分より小さい子が抱かれている。泣くがこれは無理だと仕方ないと思って、下ろすまで絵本の方に行く。一人だったら絵本に行くような子ではない、自分の感情の気をそらしていた。多分これが兄弟や集団の中で起きてつけてきた。今度は抱かれている赤ちゃんを観てください。多分、兄弟の中や集団の中で起きてきた。今度は抱かれる赤ちゃんの方を見てください。この子が抱かれたがっている、自分は抱かれている。抱かれたがる存在であることを気にしている。泣いている子を見て、目をつぶって気づいていないふりをしている。優先席に座っている若者みたいですね。抱かれたがっている意図を分かっている。赤ちゃんをよく見ると起きるが一人だったら抱っこできるが、二人いるとできない、これは３人にいないと起きない。昔だったら、共同保育の中で起きていたかもしれない、今は泣いたらすぐ抱っこします。抱っこしたら、あの脳は大きくならない。大きくする条件は応答的と言うよりも、子ども集団の中で育つことで、これは研究されていないが、我慢する力と同時に、なるべく多くの人の顔を見ることで他者を理解することになるので、その顔を見ることで、共感力や他者の意図を理解出来るようになると言っている。この時期にいろいろな人の顔を見ることが大事。色々な人の声を聞く事で、言葉を知ったり、声のトーンを知ったりする。人類の誕生の頃と同じ生活をしている民族にサン族がいる。赤ちゃんが生まれると、村中の人に代わる代わる抱っこしてもらう。抱っこしたら、赤ちゃんに小さな貝殻の首飾りを掛けてあげる。貝殻が多いほど、生存率が高いと言われている。半年かけて村中の顔を知ってもらう。何で必要かというと、他の民族を警戒しないといけない。襲ってくるかもしれないし、感染症を持っているかもしれないので、半年経つと知らない人を警戒するのが、９ケ月くらいからはじまる。人見知りは、お母さん以外にすると思っているが、同じ民族以外にすると言われている。それまでに色々な人に抱かれる必要がある。それが小さい頃の特定な人ということであって、一人の人ということではありません。一人の人では危険ですね。一人の人に当てはめるのは危険なことで、同じ民族の人、園で言えば園の中の職員みんなです。実は最近、愛着の講演を遠藤先生が海外の愛着の研究をした結果、赤ちゃんは複数の人と愛着形成を結び、その中で優先順位が違う。誰が優先的かは決めるけど、その人が居なければこの人、こういう状況にはこの人と、使いこなすと言われている。うちの成長展の動画とセリフを見てください。女性の先生の所しか行かない赤ちゃんがいて、ある日、その子にとって不幸があって、父親保育があった。その日は全員男性です。この男性職員は優先順位が最下位でした。ただ、父親保育の日は最上位にあがった。赤ちゃんは複数の愛着存在をもって、この先生がいなければこの先生と、全ての先生が全てのことに関わったり、保育すべきであると思います。赤ちゃんは男性に囲まれて怖い思いをしたが、ここにもし女性がいたときに、本当に怖い想いをした時には、男性の所に行くのではないかなと思う。男性に立ち向かえるのは男性かもしれません。これは、豆まきの鬼が来た時に男性の後ろに隠れる。誰が助けてくれるかで行く。子ども同士の関係の中で育っていくので、脳のセンシビリティ（感受性）も脳の応答性と研究されているが、子ども同士も関わりも大事だろう。マシュマロテストで、１５分食べないで我慢出来たらもう一個上げる。食べたくなったら、食べてもいいよと研究した結果、我慢出来た子を追跡調査した結果、その後の人生もよかったと言われているが、

集団社会化理論を出したハリスという人の考えを元に見てみたら、マシュマロテストには、ある欠点があることが分かりました。一人の子が１５分、保育園で待ち続けることはありません。それなので私の園では、集団の中でやってみたら、ある４歳児がすぐ食べてしまう子がいた。この子が食べない方法があった。それは、すぐに食べてしまう３歳と一緒にしたら、すぐに食べようとする３歳の子を止めていた。３歳がいると「だめ！」と言って、子ども集団はそういうもの。園の中は、一対一だけでないものがある。私たちは子ども同士の関係をつくり、先生は「見守る」ということが大事。子どもはもともと、子ども集団の中で生きてきた。だいたい、大人と子どもが向き合って遊ぶことなんてなかった。大人と子どもが遊ぶようになったのは、保育者が出来てからの様な気がする。子どもは、子どもの中で遊んでいて、必要な時に大人を呼んだと思う。私のプライベートでは、妻は働いていなかったので子どもは幼稚園に通っていました。保育園を私が始めた時に、妻が園を見に来た。まずびっくりしていたのが、先生が子どもとトランプをしていること、専業主婦は夕飯をつくらないといけない。子どもと遊んでいたら夕飯は出来ない。１日家にいるから、さぞかし子どもと過ごせるでしょう？と言われるが、そうではない。私が家に帰ると、部屋中散らかっている。もう１つ、孫のヘルプに妻が行くことがあるが、ボランティアで私の園に来た。１日過ごした後の感想は、「保育士は楽ね」と言っていた。子どもと遊んでいると、給食の準備が出来ましたと出てくる。主婦では、いつまでも遊んでいられない。食べ終わると、調理の先生が洗ってくれるが、家では自分で洗わないといけない。小さい子がいると、トイレに一人で行ったことがない、一人でトイレに行きたいと思っていたと言われた。開けっ放しか、連れて行かないといけない。先生が複数で見ていると助かる。一人だったら大変、食事も掃除も一人、赤ちゃんともそんなに遊べないと言っていた。専業主婦は、むかしはなかった。子どもは子ども同士で遊んでいたし、赤ちゃんも籠に入れられていた。その子ども同士の学び合いが、家の中と地域になくなってしまった。それがあるのは、保育園しかないと思っている。先生が子どもを見るとか、見ないとかの議論ではなく、子どもが手を出さないといけない。他の子が仲裁に行くとか、他の子が助けに行くとか、子ども同士を私たちは意識しないといけない気がする。そのために、先生は「見守る」。

―「見守る」保育のポイント３―

これがどうも最近の子は気になる。うちの保育士にも言ったが、今の子は片づけなさいというと、自分は使っていないからとか、俺が捨てたものじゃないと言ってしない。片づける時に、「自分で使ったのだから、自分で片しなさい」と言うが、そうではなくて、「片づけると気持ちよくなるから、片そうね」と言わないといけない。「ゴミが落ちていると、気持ち悪いから片そうね」と言わないといけない。自分が捨てたからではなくて、誰がやっても片さないといけない。ホモサピエンスは、助け合うとか協力してきた。それを現代まで持ち越したのが日本人だと思っている。他の国より助けてあげようという気持ちが強い。サッカーで日本人サポーターが片していたと有名になった。そういう力を持っていると思っているが、その力を失くし始めている気がしていて、人類は滅びる方向に行くと思っている。元々助け合う、援助し合う。チームワークがよかったから、みんなで助け合うことで生きてきた。その力をもう一度、つける必要がある。そのために手を出すとか、出さないではなく、子どもに言ってもらうことも大事。去年プールで水死した子がいる。先生が見ていたかどうかがあって、プールには監視員を置きなさいと通達がきた。あの事故が起きたとき、現状は分からないが、思ったのは、水の中で溺れたときに他の子はどうしていたのだろうと思う。他の子が水に沈み、おかしいと思わなかったのか。先生を呼ばなかったのかとか、知らん顔をしていたのだろうかと思ってしまう。一緒に遊んでいる子がどうしたか。助けに呼ぶ子に育てないといけない。大人が見てたか、見ていなかったかだけでなく、子ども同士がやってあげようとしているかなど、保育の中で付けていかないといけな

い。私からすると二つ目です。「見守ること」の必要性です。時代が変わってきて、　子どもに必要な力が変わって来ました。皆さんは若いので当然だが、そのギャップがすごい。うちの職員の若い人とＴＶを観ていて、ある音楽番組を観ていて、最近当たり前だがショックだったのが、歌に合わせてその職員が歌っていた。彼に「この歌知っているの？」と聞いたら、「懐メロが好きで、歌えるんです」と言った。懐メロが好きなんだ、と思ったら、何年に流行ったかというと、平成１１年で、この子にとっては懐メロなんだと思った。私からしたらこの前。「この歌が懐メロなの？」と聞いたら、当時３歳と言っていた。そういう時代の職員と、もっとそれより若い子どもたち。時代が違っている。大きく何が違ってくるかというと、ＡＩの時代になる。そうすると、人の能力、価値観が変わってくる。私たちの子どもの頃は、頭がいい、成績がいいというのは、多くのことを知っている人がクラスの中でいい子。どれくらい知っているかを試すのがテスト。それが頭がいいのなら、今だったらコンピュータが知っている。一番コンピューターが偉いかと言ったら、そうではない。覚えることに価値がないことがあって、そうではない力が求められる。世界経済協力機構 ＯＥＣＤが教育２０３０というものを出した。昨年小学校に入った子が、社会に出るのが２０３０年で、小学校の授業を変えるようにと提案している。２０３０年に社会に出る年です。私たちが関わっている子はもう少し先です。その時代にどんな力が必要かを考えないといけない。私の孫がままごと遊びをうちでしていて、これを欲しいと言って、お店屋さんで全部で１３００円ですと言ったら、財布から１３００円を出すのではなくて、カードを出してピッとした。買い物屋さんも、お金ではなくなる。Pay になると思う。妻の所で、コンピューターごっこをしようと言って、データを送るねと言って、データを送る時に昔はＵＳＢだったが今は遊びの中にいれている。もっと、そうなることに対して、私たちは人しか出来ないこと、人にとって価値あることが必要。覚える、知っているよりも考える、自分のことを表現する、言うことがこれから必要になって来たときに、先生の話を聞いておきなさいではない。聞く事ではなく、それによって自分の考えをつくること、人に言えることです。与えられたものをそれ通りするのではなく、ドイツでは、その一つの方法が参画。同じ言葉で参加があるか、参加は誰かが決めたイベントに対して加わることが参加。参画は、そのプログラム自体をつくること。例えばドイツでは、遠足に行くとします。そうすると、クラスの代表がどこに行くかの候補を５つくらい出します。それを階段の通り場に出して、「候補が出ました、行きたいところにシールを貼ってください」と、遠足のいく場所を決めていた。大人が全て決めるのではなく、決めること自体に、子どもが入っている取り組みをしています。決められた通りするのではなくて、先生がやってあげるとか、教えるのではなくて「見守る」ことが大事です。うちの職員の特徴が見えたのが、実習生が来た時に、子どもと遊んでいました。給食の時間であることに気付かないで遊んでいた。「もう給食の時間だ、早く行って並びなさい」と実習生が言ったが、うちの職員だったら、「もう給食の時間だけど、どうする？」と子どもに聞き、「すぐに行くよ、きりが付いたら行くよ」と、どうするかは自分で決めさせる。しかし、どうすると言って、子どもは行く時を決める。すぐに行くか、きりが付いたら行くかを決める。ＴＶで東大に合格した家庭の保護者が、どういう教育をしていたか特集していた。塾行く子もいれば、いかない子、本を読む子、読まない子がいたが共通するのが、子どもが言ったことをきちんと聞いてあげること。子ども言いたいことを聞く事、大人が先回って言わないことが一つの特徴。聞き終わった時に「ふ～ん、あなたはどうしたの？」「どう思ったの？」と、どうしたのか、どうしたいのかを聞く事が共通していた。相手の話を聞いた後に、どうしたいの？どうするの？と聞く事。保育の中でも一杯言ってくる。それを先回って言うのではなくて、聞いてあげたときに、どうするの？どう思ったの？と質問することです。私は質問することは、いろんなことを聞く事だと思っていた。テストのように聞く事ではなくて、子ども側に決定させるとか、自分の意見を言わせることです。それをちゃんと聞いてあげる。先回るのではなくて、自分で自分の意見を言うとか、主体的に生活をすることを増やすことがもう一つの「見守る」です。

―おわりに―

なぜ今の時期に「見守る」ことが大事かというと、一つ目がグラフで示したように脳の刈込み、順に減らすこと。必要以上にやってしまうと減らせなくなってしまう。それから必要なものを減らしてしまいますので「見守る」ことが必要です。２つ目が、センシビリティあの高さを維持するためには、応答的な関わりや、質問することをして本人が主体的に活動するようにすることと、子ども同士の環境を作ることが、高さにつくること、それが「見守る」スタンスです。３つ目は、人類はもともと助け合ったり、チームワークをつくったりする。大人対子どもの二項関係というが、二つの関係ではなく、子ども同士という三項関係を、先生はどう作っていくかが大事。どこまで手を出すか、出さないかの議論だけでなく、他の子どもをどう介入するかの観点も大事。大人が言ったことをやれるようにするのではなくて、自分が何をしたいのか、自分から決定をしていく、自分で責任を取ることをつくっていくことが、これからのＡＩ時代に先生は引いて、「見守る」というきっかけを作って、発展させる役目をする。子どもの発想を取りあげて繋ぎ、発展させることが質が高いと言われているが、最近流行っているプロジェクト保育。発展させるような働きかけをすること、子どもが興味関心を持ったものを拡げていく役目。そうすることで、先生がやってあげるのではなくて、取りあげるというスタンスが「見守る」の観点です。色々な観点から見ても、「見守る」のスタンスが、これからますます重要になってくると思っています。シンガポールで「見守る保育」が始まっているが、ウォッチ＆ウェイトと訳している。見て、先生が手を出すのを一呼吸待ちましょう。子どもをよく見て、少し待つ。それは本人の力、友達同士の力を信じることと訳している。「見守る」をそのまま使っています。その意味として、保護者にもそのスタンスを提案しています。それがこれからの時代に必要になってくる。子どもの力を伸ばす関係、保育者のスタンスだと思います。ますます関わり方が重要になってきて、シンガポールや中国で広めようとしてくれています、今までのように、教える、やらせるではないこと。これからいろいろな中で、様々の観点からどういう実践をしているのかとか、ドイツではどうかなど、「見守る」の観点を知って欲しいためセミナーをしていますので、知ってもらえたらと思います。ありがとうございました。

本稿は、2019 年 8 月 5 日に行われた第 51 回保育環境セミナーの講演内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）

caguya
〒161-0023
東京都新宿区西新宿 3-2-11　新宿三井ビルディング 2 号館 10 階
Tel:03-5909-7155
毎週月曜日に配信しています。
ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ　奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン
メールマガジンのご登録は、
ＱＲコードからお願いします。